ヒロシマへ平和を祈る折り鶴を贈るようになったのはなぜでしょうか？

広島に原子爆弾が投下されたとき、佐々木 禎子(ささき さだこ)さんは２歳で、爆心地から1.7キロメートル離れた家で被爆しました。元気で明るく、かけっこが得意で、将来は体育の先生になる夢を持っていた禎子さんは、小学校６年生のとき白血病で入院します。１年間の闘病の間、名古屋の高校生から病院に贈られた千羽鶴を見て、折り鶴を千羽折ったら病気が治ると信じて鶴を折り続けました。

原爆資料館には、入院中の禎子さんが祈りを込めてクスリを包む紙で折った、小さな鶴が展示されています。

禎子さんの亡くなった後に同級生たちが呼びかけて、折り鶴をささげ持つ少女の「原爆の子の像」が平和記念公園に建てられました。原爆で命を失った子どもたちへの慰霊の塔です。

少女のモデルは禎子さんです。
原爆で亡くなった方々への慰霊と一羽一羽に核戦争をなくす平和の願いを込めた折り鶴が毎年、国内外から届けられています。

平和を願って千羽鶴作りにご協力ください。